『八月の光』におけるコミュニティーの言語空間とよそ者の地位

大野　真

フォークナーは「ヨクナパトーファ・サーガ」と呼ばれる一連の作品において，「ヨクナパトーファ」という一つの社会を描いた。フォークナーが描こうとするものは，単に個人個人の生を超えた一つの社会なのである。

『八月の光』もその例外ではない。この作品において扱われているのは，「ジェファーソンという名の一つの町＝社会である。[1]

しかし，フォークナーのコミュニティーの描き方は一風変わっている。

それは，『八月の光』の主要人物たちがみなコミュニティーから見れば「よそ者」的な存在であることに表われている。

例えば，主人公のジョー・クリスマス。彼は長い放浪生活の後にジェファーソンという町にたどりついた「よそ者」である。しかも，クリスマスは一見してすぐに町の人々に異和感・不安感を抱かせるような存在なのだ。また，この作品のもう一人の主人公とも言われるリーナ・グローヴも，ジェファーソンの町の住人ではなくて「旅する者」であり，つまり「よそ者」である。

『八月の光』のその他の主要人物たち — 例えば，ミス・バーデンやハイタワー，バイロン・バンチといった人々も，やはり「よそ者」的な地位を与えられている。彼らはジェファーソンの町に長く住んでいるにもかかわらず，町の人々とは溶けこめないところがあるからだ。加えてミス・バーデンの場合には先祖が北部出身者であるという事情がますますその「よそ者」性を強めている。

『八月の光』の主要人物たちは，いわばジェファーソンというコミュニティーの「裏」方の人物たちなのである。その代わりに，本来コミュニティーの表側にいるべき町の人達はこの作中ではむしろ舞台の背景に回っている。いわば，『八月の光』は裏方と表方が逆転した世界なのである。フォークナーは裏方のよそ者をもって表側のコミュニティーを描くのである。

『八月の光』における主要な事件である「クリスマスの追跡と処刑」は「現在の十一日間」に起こっている。この「現在の十一日間」において，今までコミュニティーの裏にいたよそ者たちが重要な意味を帯びて浮上してくるのである。

このことは，とくにパーシイ・グリムに対する町の人々の態度の変化に明らかであろう。グリムは有色人種に対する白色人種の優越，とりわけアメリカ人の優越を説き，アメリカの軍服と軍法を盲目的に信奉するファシスト的な存在だ。彼はふだんは町の人々からは奇異な目で見られている。しかし，「クリスマスの逃亡と追跡」という異常時になって，町の人々がグリムを見る目が変わってくる。「いつの間にか町の人々は自分たちがそう考えていると自覚するより先に，とつぜんグリムを尊敬の念で，それに少しの恐れと多くの信頼や信用の気持で見つめ」始めるのである（504）。[2]

このように『八月の光』における「現在の十一日間」はコミュニティーの表と裏が逆転する異常な特権的時間である。

この特権的時間を，「俗なる時間」と対立する「聖なる時間」と置き代えてもいい。『八月の光』は，クリスマスのキリスト性・スケープゴート性やリーナの聖性・救済性など様々な宗教的解釈を受けてきた。[3] それも『八月の光』の現在時が聖なる特権的時間であることを考えればうなずける。

ここで注意すべきなのは，この聖なる時間が静穏な時間ではなくて，むしろ正気と対立する狂気の激しさをもった時間であるということだ。なぜなら，この聖なる時間は今まで蓄積されてきたコミュニティー内の矛盾が一挙に表面に暴発する時だからだ。

『八月の光』の「現在の十一日間」で，ジェファーソン内に蓄まっていた黒人偏見が「クリスマスの処刑」という形で現実の暴力として表面化する。

黒人偏見が現実の暴力となる過程において，フォークナーは群衆心理的な要素を巧みに活用している。

例えば，クリスマスによるミス・バーデン殺しを町の人々が知ったときの場面の描写である。「彼らはこのいかにも黒人らしい犯罪が単に一人の黒人によってというよりも『黒人全体』によって行われたと確信し，また彼女が暴行されもした，すくなくとも彼女が咽喉を切られる前に一度，そしてその後にも一度はされたのだと知り，信じ，そう願っていたのだ」(315-316)。このようにして，「黒人」というコトバを引き金にして憎悪は強化されていく。こうした群衆心理の描写には，催眠術において見られるような「被暗示性の昂進」が見

られる。ここでは「黒人」という語が群集を暗示に導くためのキー・ワードとなっている。

被暗示性が高まっていくにつれて，「感情の投影現象」が容易に起こるようになる。町の人々は，ミス・バーデンの家の火事を見て，「三年前にもう堕落してしまっていたあの女（ミス・バーデン）の清教徒的炎や血や肉体を元のままだと信じ，それがいまや再び甦って復讐を叫んでいると思い込」む(317)。このように，町の人々の蓄め込んでいた黒人に対する憎悪が死せるミス・バーデンの上に投影される。こうした被暗示性の昂進・感情の投影には，火事という「火」を見つめる行為も一役買っているであろう。高まった群衆心理はやがてその憎悪を実行する者として一人の指導者を必要とし，そこでファシスト的なグリムが登場することになるのである。

集団の被暗示性が強まったときに，集団心理の知的な批判力は鈍り一種の原始心性を示し始める。フロイトは群衆心理の原始性を扱った論文において，言葉が一種の「言霊」的な力を帯びてくることを指摘している。言葉が言霊として動き始めるのは，神経症患者や夢の場合においてもみられる。

言葉の言霊性は，フォークナーの作品中において「名前のシンボリズム」となって端的に表われる。[4]

例えば，『八月の光』の登場人物たちの名は「クリスマス＝キリスト」や「バーデン＝重荷」など象徴的な意味をもつものとなっている。バイロンはクリスマスの名前について次のように思う。「 ― 名前というものはただ人間を区別するための記号にすぎないはずなのだが，場合によると名前が当人の未来の行動を暗示するものとなり，いつかは『やっぱりそうだった』と人々にうなずかれるようなことにもなるんだ ―（中略）― この男〔クリスマス〕はどこへゆくにもその逃れえぬ名前で恐ろしい警告を発する人間であって，いわば花なら匂い，ガラガラ蛇ならその尾の音と同じように，その名がこの男の本体を現わす，と皆は直感したようなのだ」(35)。名前のシンボリズムは，（あたかも『響きと怒り』においてすいかずらの花の匂いが空間を浸していくように）『八月の光』の言語空間を浸していくのである。

名前が象徴性をもつゆえに，登場人物たちは自分の名にこだわる。例えば，クリスマスは幼い時に「自分の名はマッケカンでなくクリスマスだ」と強く主張する。また，バイロンはブラウン（実はルーカス・バーチ）という「変名」の影に何か怪しげなものを正しく察知するのだ。

名前はさらにプロット構成の上で重要な役割を果たしさえする。そこにおいて，フォークナーは「名前の類似・同一や繰り返し」といった手法をよく用いている。「名前の類似」に関して言えば，例えば『八月の光』においてバイロンとリーナが出会う機縁となったものは，バイロン・バンチという名がリーナの探し求めるルーカス・バーチという名と響きが類似していたためだ。また，「繰り返えされる同一の名前」の例としては，『土にまみれた旗』がある。そこでは，ジョンとベイヤードという二つの名前が幾世代かにわたって繰り返されて，その名をもつ者たちの運命を暗示するものになっている。

フォークナーにとって登場人物たちのシンボリックな名前は，読者と作者自身を催眠状態におけるような被暗示性の強い状態に導くためのキーワードだと思える。原始心性において言葉の言霊性は強まるが，逆に言葉の言霊性を強調することによって読者を群集心理・夢・神経症者に類した原始心性へと導くことができるように思える。いわば，読者を軽い狂気の状態へと置くのである。催眠術におけるような単調な刺激の繰り返しや四元素の使用は読者をフォークナーの世界へと引き込んでいくのである。こうして被暗示性を強めておけば，感情のエネルギーの可動性が高まり，作品と読み手の間に感情の投影・転移が起こり易くなる。つまり文学を成り立たせているところの「共感能力」が増大するのである。

さて，今まで述べたように，コミュニティーは俗なる時間において蓄積された矛盾・潜在的な狂気を聖なる時間において爆発させることにより安定を保っている。いわば，「俗 — 蓄積 — 平衡」と「聖 — 爆発 — 非平衡」という運動のサイクルを繰り返すことによって，コミュニティーは一つの自律性を保つようである。

この「平衡状態と爆発」のサイクルは，例えばハイタワーの場合においてみることができる。先祖の伝説におぼれて現在を見失ない妻を死に至らしめてしまったハイタワー。彼は説教壇で先祖の過去の栄光を時代錯誤的にまくしたてるなど，町では異端の存在だ。その異端児ハイタワーが料理人に黒人を雇ったという噂から，白人優越主義の結社K・K・Kから脅迫状が届き，遂にハイタワーはリンチをうける。しかし，一度異端児ハイタワーへの秘かな敵意が黒人ということを引き金として現実の暴力として爆発すると，町は再び落ち着きを取り戻す。まるで「流行風邪」でも通り過ぎたかのように。そして町はハイタワーという異端児の存在を内部に包むことを許容するのだ。もっとも，それには

「異端児」が辺鄙な場所（ハイタワーの場合は今はすたれた通り沿いの家）でひっそりと暮らすという条件がつくようだが。

「蓄積と爆発」のサイクルにおいて自律性を保っていくコミュニティー。では，コミュニティーにおける「蓄積」は何を媒介にして行なわれるのか？

それは「言語」を媒介としての蓄積であるということができる。

フォークナーのコミュニティーは音や臭いに満ちた濃密な空間を形成している。その濃密さを作り出すものは言語である。ここで仮に「網の目」という錯綜したイメージを使用して「言語空間の網の目」と呼ぼう。

コミュニティーでの言語空間の特徴は，とくにその噂や偏見においてあらわれる。コミュニティーが一つの社会として自律性を保つためには，何らかのシンボル体系を通じて結束する必要がある。ホワイトヘッドが『象徴作用』において言うように，或る社会（分子社会から人間社会に至る！）の盛衰はその中心となるシンボル体系の盛衰と等しいのである。一つの社会を社会たらしめているものは，物理的地理的な境界以上に，それを特徴づけているシンボル体系 ― とくに言語である。

さて，「噂や偏見」の重要性を考えてみた場合に，コミュニティーにおける「よそ者」の意義が明らかになる。なぜなら，「よそ者」という不可解な存在をめぐってこそ，コミュニティーの噂や偏見は集中するものであるからだ。

例えば，クリスマスの同僚である製材工場の人々は，うさん臭い「よそ者」であるクリスマスの存在を強く意識せざるを得ない。さらにクリスマスの仲間として同じく「よそ者」であるブラウンやミス・バーデン（彼女の先祖は北部人である）が加わることにより，ウィスキー密造に関する怪しげな噂が立ち始める。

ミス・バーデンの家は，彼女が黒人とつきあっていることもあって，とくに噂の増殖点として「亡霊屋敷」的なイメージをもたされている。ミス・バーデンはハイタワーと同じく「ひっそりと辺鄙な所で暮らす」という条件つきで町の内部に許容されている。しかし，黒人好きのミス・バーデンに対する町の人々の秘かな敵意もやはり増殖していたようだ。町の人々は彼女の生前には決して自分達の妻に彼女を訪問させなかったし，子供だったころには街で彼女の後ろから「黒ん坊好き！」と罵ったりもした。子供の場合は大人では潜在的な敵意が容易に表面に出てしまうのである。

フォークナーは，こうした噂や偏見の中心となる「よそ者」どうしを互いに結びつけていくことにより，言語空間の網の目をさらに重層化させている。

「よそ者」どうしの結びつきは，或る意味で「似たもの」どうしの結びつきと

も言える。クリスマスとブラウンの交友について書かれているように，似たものは似たものどうしを嗅ぎあてるのだ。（二人の間では特に同性愛関係が示唆されている。）工場の仲間からは全く妙な人間だと思われているバイロンと奇人ハイタワーはやはりそのような「似たものどうし」として相手を嗅ぎ当てたのであろう。

こうした男たちの列に女性たちが加わる。『八月の光』の「よそ者」たちは，リーナ或いはミス・バーデンと関わることによって，明（生）或いは暗（死）への変化を遂げていく。「男が女に関わること，そしてその事による変化」という永遠のテーマがフォークナーをとらえている。

こうした「よそ者」どうしの結びつきをさらに効果的にしているのは，フォークナーに特徴的である「語りの重層性」である。『八月の光』では，バイロンがクリスマスやリーナについてのことを友人のハイタワーに語り，語り直す。噂の中心点であるよそ者どうしに語りの重層性が加わることにより，言語空間の網の目はさらに絡み合ったものとなる。

さて，『八月の光』において，偏見や噂はとくに「女性・黒人・キリスト教」という三つのテーマをめぐって展開される。クリスマスの生涯の回想シーンを跡ってみると，彼の生涯においてこれらの三つの主題が絡み合いもつれ合って彼を終局の悲劇へと導いていく様が納得できる。

この三つの主題はとくにクリスマスとバーデンの関係において最高度に展開される。先祖から厳格なキリスト教を受けついだミス・バーデンという女性は，黒人を白人の「罪」と相関して考え，その罪意識ゆえにかクリスマスの黒人の血を執拗に意識し続ける。いわば二人の関係にはキリスト教的な罪がつきまとうことになってしまうのである。

『八月の光』にあらわれる女性や黒人に対する偏見。或いは，クリスマスとミス・バーデンとの関係において見られるように，「女性・黒人・キリスト教」という三つのテーマが絡んだときに現われる「歪み」。こうした偏見や歪みをもたらしている要因には，「女性や黒人」が「白人・男性」（フォークナーもその一人である）にとって異質な「よそ者」的な存在だということが大きく作用している。「女性・黒人」という「よそ者」はその異質性・未知性ゆえに「白人・男性」の関心をひく。しかし，「よそ者」が言葉を呼び込むのは偏見や噂といった歪んだ形によってである。また女性や黒人もその異質性ゆえにキリスト教においては「罪」というマイナスの側面からとらえられてしまう。これは不幸な構

造というべきではないだろうか。

コミュニティーはこの三つのテーマをめぐって噂や偏見という言語の網の目を張って「よそ者」を待ち構えている。不幸にもクリスマスは「キリスト教を厳格に信ずる女性」ミス・バーデンを殺すことにより，ジェファーソンの「黒人偏見」の網の目に陥ち込んでしまった。不可解なあいまいさをもつ存在であるクリスマスが「黒人」という一義的解釈を受けてしまったときに，彼の運命（死）もまた決定されるのである。網の目に引き込まれていくクリスマスの姿を見るときに，彼の運命に「予定説」的な決定論の影がのしかかるのだ。

ここで少しクリスマスの黒人の血における「あいまいさ」について考えてみよう。黒人の血を持っているのかいないのか明確に決定できないというあいまいさは，クリスマスのアイデンティティーを自己に対しても他者に対してもあいまいにさせる。こうしたあいまいさは何としても居心地悪くまた不安をかきたてずにはいられないものだ。それ故，クリスマスは自分の関係した女（初恋の給仕女や娼婦たち，さらにミス・バーデン）に対し「自分が黒人の血を持つこと」を告げる「告白衝動」に駆られるのであるし，また，他人は彼にどことなく「根無し草」めいたうさん臭さを覚えるのである。

しかし，他面「あいまいさ」はその決定不可能さ故に物語の構成上積極的な意義をもっている。ジェファーソンの町の人々は，クリスマスにまつわる「どことなく妙な（funny）ところ」を「彼は外国人である」ということで最初のうちは解釈していた。ところが，キリストを売るユダよろしくブラウンが「クリスマスは黒人の血を持っている」と告発すると，町の人々はその解釈へと飛びついていくのである。警察署長は言う。「黒ん坊か ― どうもあの男には何か妙なとこがあるとは，いつも思っていたんだ」(108)。また或る店主は言う。「あの蓄 ― 人殺しですよ。あっしはね，前からやつがまともじゃないと言ってやしたよ。白人じゃなかったんでさあ。どうも変なとこがありやしたね。しかし普段ははっきり分らないもんでこんな ― 」(339)。

決定不可能なあいまいさをもつ存在は他人を不安にさせる。そこで町の人々は外国人という説よりもさらに自分たちに納得のいく黒人という説を採り，クリスマスを自分たちの黒人偏見の網へと引き込んでいく。いわば不可解な存在を一義的に解釈し決定づける予定説的な運動である。逆に言えば，クリスマスの不可解さが黒人という解釈に落ち込まぬ限り彼は安全なのだ。クリスマスにまつわる「血のあいまいさ」は，物語のクライマックスを「現在の十一日間」にもち越すため

の有効な設定といえるかもしれない。

さて，こういう噂や偏見の支配する言語空間は何と言っても閉鎖的なものである。こうした「閉鎖的な言語」は，とりわけ「秘密や嘘」という形で『八月の光』中に表われてきている。

とくに秘密や嘘は女性と密接に結びついたものとしてイメージされ，また，ピューリタニズムの厳格さの背後に秘む罪への強い誘惑と連想されている。

例えば，クリスマスの養母マッケカン夫人とミス・バーデンの場合を考えてみよう。マッケカン夫人はムチで打たれたクリスマスに食物を運んでくるとき，その行為が夫に秘密であることをことさらに強調する。またクリスマスの屋根裏部屋の壁にある弛んだ板の奥に夫人は小金の入ったブリキ罐を隠し，クリスマスがそこから金を盗るのを誘発し，秘密めいた共謀さをもとうとする。彼女は「秘密に対する女性特有の性向と本能でもって，実につまらぬ無意味な行為にも罪悪の微かな汚れを塗りつけた」のである(185)。ミス・バーデンもやはりクリスマスと関係した後は秘密と罪への強い志向を見せる。彼女は世間が禁じている話題や対象に強い好奇心を示し，またメモ用紙や手紙の隠してある場所があると主張して「秘密ごと」のゲームを楽しもうとする。そして地獄の罪と汚辱の中に生きようとして汚ない言葉を貪ぼるのである。

秘密や嘘（クリスマスは給仕女と恋をすることにより初めて嘘へと導かれる。それをマッケカンは嘘言と色欲の二つの罪という具合にまとめている）は，言語がキリスト教的な罪に閉じ込められた時に起こる歪んだ形である。考えてみれば，マッケカン夫人もミス・バーデンも白人・男性のキリスト教に犠牲とされ歪まされた存在だ。ミス・バーデンが父や兄たちの厳格なキリスト教から結局逃れ得なかったように，マッケカン夫人も厳格なキリスト教信者である夫が運転する単なる機械のようである。しかも彼女は女性にありがちの気の回し様によってクリスマスを束縛し閉じ込めていこうとするのだ。鷲のもつ自由な生命に憧れるクリスマスにとって彼女は忌わしい。彼が夫人のブリキ罐内のへそくりを盗むときに「覚えときなよ。俺は頼まなかったぜ，なぜってそうすりゃあんたは俺にこれをくれちまうだろうからさ。俺はこれを勝手に取ったんだ。それを忘れるなよな」(230)と夫人に言い放つのは，彼のせめてもの自由意志の主張である。

「女性・黒人・キリスト教」が独得の歪みを受ける世界。「偏見・噂・秘密・嘘」という閉ざされた言語の網。こうした閉鎖的な世界からクリスマスは遂に逃れることはできなかった。鷲にとってあらゆる空間は結局「檻」なのである。

こうした閉ざされたイメージが最も明確に出ているのは，クリスマスの人生を要約するときにフォークナーが用いている「円周の道」のイメージであろう。[5]

「道（交通・旅）」のイメージはこの作品において重要である。中でもクリスマスの長い放浪生活が「十五年の長い道」として表わされていることは読者に強く印象づけられるところだろう。

しかし，クリスマスの生活を彩る「道」は実は閉ざされた「円」に他ならなかった。ミス・バーデンを殺した後逃走中のクリスマスについて次のように書かれている。「彼はいま再び入ってゆく，三十年間自分が走りつづけた道路へと入ってゆくのだ。それも誰もが急速に動いてゆかねばならぬ舗装した道路へなのだ。それは円をなしていて，彼は依然としてその内側にいるのだ。この七日間の彼は舗装せぬ道におり，七日ではあったが，その前の三十年間にしたよりも，ずっと遠くまで旅をしたのであった。しかもそれでいて彼はやはりその円の内側にいる」(373)。

クリスマスが結局「円の内側」から出られないことを認識するときに，この作品におけるクリスマスの死には予定説的な色調が濃くなる。クリスマスは殺人現場から二十マイルと離れていない町に入ってきて，通りを平気でのそのそ歩いて捕まってしまう。その後またクリスマスは脱走をするのだが，それからはむしろ「追うものと追われるもの」のゲーム性が強くなっていく。とくに，グリムがクリスマスを追跡するシーンをチェスの指し手の動かす駒に喩えて描写しているあたりでは，予定説に則ったゲームを自己認識する作者の手が見えてくる気がする。

さて，クリスマスにおける「閉ざされた道」のイメージは，また彼をめぐる「時間」の解釈とも関係してくる。クリスマスの生涯という時間は「三十年の道」という道のイメージと連想される。「閉ざされた道」とは「日付や日数という垣根で取り囲まれた時間」(364－5）であるのだ。「日付で囲まれた時間」とは，ベルクソンの『時間と自由』における考えによれば，「自由に流れる時間」とは対立するものだ。

「囲まれた時間」はまた「網の目」のイメージとも結びつく。コミュニティーにおける閉鎖的であるが故に錯綜した言語空間。その「網」のイメージは「時間」の処理にもうかがえる。フォークナーにおける時間は直線的時間ではなく，現在と過去が交錯する「網の目的時間」である。そこにおいて時間は（語りの重層性に基づいて）挿入・逆行・飛躍・分断される。

コミュニティーという自律した社会の言語空間の網を特徴づける偏見は，「過去」からもたらされたものである。過去の言説はつねに現在に侵入する。

そこにおいて見られるのは，現在の人間が自由な連想によって過去の事に行き着くというのではなくて，むしろ過去による現在の「呪縛」であるように思われる。場合によっては過去が現在を奪い尽してしまうような悲劇もある。例えば過去の先祖の栄光に取りつかれたハイタワーの場合のように。ハイタワーの家はバーデンの家と同じく過去の亡霊（ghosts）が秘む「亡霊屋敷」となっている。『土にまみれた旗』において見られるように，家に住む先祖の亡霊たちは，伝説という形の言語空間において，現在その家で暮らす子孫たちの行動を呪縛し規制していくのである。

面白いのは，過去に呪われた人間ハイタワーが非常な本好きとして描かれていることだ。本とはここでは過去の言説の文字における集合体と考えられる。それは彼と妻との間の悲劇の伏線となっている。

彼の愛に対する考えは書物の中から得られたものである。そして彼は「 — まったく，最も高遠な書物も，実際の人生に適用すると，嘘だらけのものになるんだなあ」(531)とか「たぶん愛なんて，本の中以外はどこにも住めそうにないものなんだろうな」などと考えている。(531)そして彼は「現実」の妻の生きた顔を見ようとしない。彼が彼女の生きた顔（a living face）を初めて見たときも，それは欲情と憎悪をつつみ情欲に歪み盲目となり険しくなった「面」（a mask）として認知されるのである（530）。欲情とか憎悪とかいった現実の生きた感情をもつ顔がハイタワーには「面」と見えてしまうという奇妙な倒錯がここにある。

フォークナーにとって過去は広大な存在だ。いわばヨクナパトーファの作品群の舞台裏にあるものが過去なのだ。『八月の光』におけるクリスマスの幼少年期の回想シーンで示唆されている「認識力に対する記憶（memory）の優位優先性」も，「無意志的記憶」つまり過去の圧倒的な巨大さを認めることに他ならない。この点においてフォークナーはプルーストなどの他の二十世紀初頭の文学と共通した志向をもつ。もっとも過去が「意味」を持つのもただ現在との接触においてであり，過去が現在に侵入するのも，フォークナーの執拗な意味探究への模索（それはしばしば描写における形容詞の積み重ねとなって表われる）が常に過去を現在へと呼び込むからに他ならない。

時間によって重層的に意味づけされ，噂や偏見に満ちたコミュニティー内言語空間の網の目。フォークナーの作家としての力量はこうした「負の力」に満ちた濃密な空間を言語によって描き出すときに充分に発揮される。とりわけ殺人や恐怖の場面を活写するときの卓抜さにそれが表われている。だが，読者によっては

こうしたフォークナー作品中の「負の力」に息苦しさを感じる者もあろう。

しかし，言語空間の網の閉じたイメージは『八月の光』の一側面に過ぎない。リーナ・グローブが開放されたもう一つの面を表わしている。よく言われていることだが，『八月の光』には明と暗の二つの旋律が流れており，リーナが暗の部分を代表している。クリスマスの物語にリーナの物語を絡ませる構成上の対位法が負の力の息苦しさを救っているのだ。

『八月の光』の「よそ者」たちの多くはコミュニティーの閉じた言語空間に捕われてしまうのであるが，リーナは別格だ。いわば「よそ者」たちの間にも差異があり，リーナは特権的な「よそ者」なのである。

例えば，彼女には秘密や嘘（つまり「罪」の中に閉じ込められた言語）が通用しない。

ハイタワーはバイロンがリーナという他人の子を宿す女と関係することを罪だと考えてそれに反対であった。ハイタワーはバイロンとリーナと関係していくことにより「嘘」へと導びかれていくと考える。「〔これはバイロンが〕わしに言った初めての嘘だ。これは彼が人に，男にでも女にでも，それにたぶん自分自身にさえ，初めてついた嘘なのだ」(336)。

しかし，バイロン自身は自分の嘘がリーナに通用しないことをよく知っている。彼は言う。「僕は懸命に隠したり，うまく言いつくろったりする必要なんかまるでなかったんです。彼女は僕の言おうとすること，嘘をつくことを先に知ってたみたいでした」(331)。

秘密や嘘のもつ表と裏の「二重性」をリーナは「突き抜けて」しまう。彼女はあたかも全てを照らし出す光である。リーナとブラウンは彼女に苦しまぎれの嘘をつくのであるが，リーナに内在する透視力は彼の嘘など吹き飛ばす。

「旅人」であるリーナは，コミュニティーの閉じた言語空間を矢のように「突き抜ける」。（物語構成上でも，旅するリーナの姿が最初と最後の場面に置かれて物語を突き抜けている）。

旅人としてのリーナは開かれた「運動性」を表わす。ラストに描かれたリーナの描写を見ると，彼女は「夫（ブラウン）探し」という当初の目標を忘れて旅を自己目的としてその運動性を楽しんでいる様である。

ハイタワーもミス・バーデンも，町の人々からは疎外されながらも町から離れようとはせずに，逆に先祖と過去の記憶のしみついた土地に強い愛着を示していた。（このような土地への哀惜の念は独得のものだ。）彼らの表わすものは「運動

性」ではなくて「固着性」である。ハイタワーは窓から通り（それも今ではすたれた通り）を眺めるだけで外へ出て行こうとはしない。彼が見るのは家に住む死せる過去の人々（先祖や妻たち）の亡霊の「顔」である。

これに対して，リーナは「窓」から裸足で通りに出て旅を始める。彼女の道は様々な場所へと通ずる「開かれた交通」を表わしている。彼女が「聞く」のは道行く最中に出会った人々の様々な声の交響である。「ルーカス・バーチ？知らんね。この道かい？これはポカホンタスへゆくのさ。その人はそこにいるかもしれんね。あるいはな。この馬車はそっちのほうへちっとばかり行くよ。まあ乗ってゆきなよ」(8)。

この声の交響に聞きとれる音楽の自由性がリーナの本領であろう。クリスマスの「閉じた円周の道」が決定論的なせきとめられた時間を表わすならば，リーナの開かれた道は「流れる自由としての時間」を示唆するのである。

注

1. ブルックスは『八月の光』における“organic society”の存在を強調し，とくにリーナという女性原理による救済の機能を重視してこの作品を“social comic”として考えている。 Cleanth Brooks, *William Faulkner: The Yoknapatawpha Country* (New Haven; Yale UP, 1963).
2. William Faulkner, *Light in August*, Vintage Books Edition, 1987. 以下『八月の光』からの引用はこのテキストに拠るものとし，ページ数を括弧内に示す。訳は加島祥造氏の訳を借用させていただきました。
3. ワゴナーはキリスト教的な観点からフォークナーの作品を分析し，クリスマスとキリストの生涯の類似点を指摘している。またミルゲートはリーナとその子そしてバイロンの旅の一行を Holy Family のイメージに喩えて，さらにリーナを月の女神ダイアナにたとえている。 Hyatt H. Waggoner, *William Faulkner: From Jefferson to the World* (Lexington; U of Kentucky P, 1959). Michael Millgate, *The Achievement of William Faulkner* (London; Contestable, 1966).
4. ワゴナーは『八月の光』における登場人物の名前からその人物の symbolic role をいろいろと探っている。“Christmas”や“Burden = burden”以外にも，例えば，“Hightower = above”や“Bunch = common and solid and unromantic”といった様な「名前の象徴性」がある。(Waggoner 111-112)
5. ヴィカリーは『八月の光』における circle, shadow, mirror という三つのイメージを指摘しているが，クリスマスの生涯においてはとりわけ“circle”つまり「閉じた円」のイメージが重要だ。クリスマスは如何にあがこうとも「閉じた円」という「お釈迦様の掌」の上から出られないのである。 Olga W. Vickerly, *The Novels of*

William Faulkner: A Critical Interpretation (Baton Rouge; Louisiana State UP, 1959 revised edition, 1964).